

岬 龍一郎著「欲しがらない生き方 高等遊民のすすめ」

角川ワンテーマ 21 角川書店 2009年6月10日刊を読む

欲しがらない生き方 高等遊民のすすめ

1. 私の好きな作家の一人に夏目漱石がいる。“坊ちゃん”は中学生のころ読み、その単純明快な正義感に拍手を送り、“三四郎”は大学時代に同じ悩みでせつなくなったものだった。“吾輩は猫である”などはユーモア小説としてもおもしろいが、社会人となってからも再読すると、そのたびに新しい発見があって^{うんちく}蘊蓄の深さに感服している。中年を過ぎる頃からは苦沙弥先生の心境が手に取るようにわかる。
2. もちろん、“門”“それから”“行人”“こころ”なども読んだが、これら後期の作品を読んでいていつも不思議に思うことがあった。有名な“こころ”の「先生」は仕事もしないで、いつ自宅でぶらぶらしているのだ。同じように“それから”の主人公の長井代助にも職業というものがない。どうやって食べているのか。それが不思議だったし、また羨ましくもあった。
3. じつはこの当時(明治晩年から大正初期)、高等教育を受けながら、時代の風潮を受けきれず、仕事にもつかないでぶらぶらして暮らしている人たちがいたのである。多くは資産家の子息たちであったが、これらの人々を「高等遊民」という。
4. 恵まれた才能と生活に困らない境遇にしながら、時代に背を向けて歩く人というのは、いつの世にもいるものだ。世間ではこういう人を「生き方の下手な人」という。だが、『こころ』の先生でもわかるように、ある意味で彼らは純粋な人といえるのだろう。
5. とはいえ、私はなにも本書で夏目漱石が描いた明治大正期の「高等遊民」をいまさらすすめようというのではない。
教養を磨いて、世俗的な欲望(出世・名声・財産)や多忙さから開放されて、独自のオリジナル生活をエンジョイする“現代の高等遊民”をめざそうという提言である。一言でいえば、お金持ちより心持ち、物持ちよりも心持ちの生き方である。その信条は、“欲しがらない”ということだ。
6. 私はいわゆる団塊の世代の波頭に属するものである。いま、われわれの世代は定年退職して社会の第一線を退き、やっと会社から解放されて自由な身となった。自由な身となったのだから、もっと好きなことをやって^{うんちく}生き生きと残りの人生を過ごしたらどうかと思うものの、彼らの多くは会社

という大樹を離れた途端、尾羽打ち枯らした鳥のように意気消沈し、元気がない。

7 . だが人生八十年の世の中。残り二十余年の長い年月をどう生きるか。誰もが迷っている。人生行路の距離が二倍近くに増えたというのなら、当然、その走り方を変えるのが知恵者というべきだろうが、われわれは相も変わらず高度成長時代の価値観で、ただ得体の知れない虚無感を抱きながら生きている。

8 . そこでわが身を振り返って提唱するのが、この「高等遊民のすすめ」なのである。要するに、わずらわしい世俗を半分捨てるという「半隠遁」の思想を持ち、金よりも面白みのある仕事をつづけながら、誰にも気兼ねしない暮らしをしてみよう、というものだ。

9 . 具体的なことは本文で述べるが、とりあえずイメージしてもらうために、高等遊民になるための二十ヶ条を掲げておく。

- (1) 高等遊民はお金持ちより時間持ち、物持ちよりも心持ちをめざす。
- (2) 高等遊民は世俗の欲望を半分捨てる。
- (3) 高等遊民はいつも“ ほどほど ” をめざす。
- (4) 高等遊民はお金がなくてもいつも楽しい。
- (5) 高等遊民は行列してまでモノを望まない。
- (6) 高等遊民はブランド品は持っていないが電子辞書を持っている。
- (7) 高等遊民はスケジュール帳など持たない。
- (8) 高等遊民は義理と人情に弱い。
- (9) 高等遊民はどのような人とも対等に付き合う。
- (10) 高等遊民は人から与えられるより与えることを望む。
- (11) 高等遊民はいつも笑顔でグチや不満をいわない。
- (12) 高等遊民は人にたかって飲食などしない。
- (13) 高等遊民はボロは着てても心は錦。
- (14) 高等遊民は正義を愛しウソは洒落でしかつかない。
- (15) 高等遊民は形式よりも中身を大事にする。
- (16) 高等遊民は儒教思想より老荘思想に親しむ。
- (17) 高等遊民は信条として新渡戸稲造のクリスチャン「 武士道 」 を愛する。
- (18) 高等遊民は司馬遼太郎と山田風太郎を併読する。
- (19) 高等遊民はなによりも知的好奇心を愛する。
- (20) 高等遊民は誰からも束縛されない自由人である。

[コメント]

岬先生の人生とは何か、「高等遊民」とは何か、のテキスト。目の前の生活はいくら忙しくとも、心の中はこのような状態でありたいという理想の書。

- 2010年2月10日 林明夫記 -